



私のふるさと

藤原 勲

私は大阪生まれの大阪育ちです。

子供の頃は大阪市南東の生野区小路という長屋住宅や町工場、鍼灸(しんきゅう)院や空手道場、豆腐屋や駄菓子屋等が混在する下町で育ちました。近所には公園や川や畑等もなく、歩いて10分程の小学校の隣にある神社の境内の大きな楠の木と裏手の繁みはその辺りの緑といえるものでした。この楠に神社の守り神の大きな白蛇がいると言われていて、学校帰りに友達と何回も登ったり、昼でも薄暗い神社の裏手の繁みで遊んだりしていましたが、遂に白蛇に遭遇することはありませんでした。

終戦間もない貧しく物のない時代でしたが、親の苦労等には無頓着で校庭や境内や路地裏で一日中遊び回っていました。そんな遊び友達や学生時代の友達、特にラグビー部の仲間は生涯を通しての親友になりました。

その後、結婚して大阪府吹田市の千里山に住むようになりました。この辺りは1970年に開催された大阪万博に向けて丘陵地帯が開発され、市営地下鉄も新大阪駅から千里中央まで延伸、阪急電車も北へと延びていきました。

しかし、まだ自然が多く残っており私の家の裏手にも竹林が続き、町の名前も千里山竹園町でした。家から少し行ったところには自然の丘陵を残した大きな公園がありました。遊具などはなく芝生や広場でバレーボールやバトミントンをしたり、丘や林や池の周囲を駆け回ったり、子育てには大変良い環境でした。桜や紅葉もきれいで両親なども呼んでよく花見をしました。

そんな折り、阪神淡路大震災が起こり今までに経験したことのない惨事を目の当たりにしました。テレビやラジオでは神戸方面やその他の被災地の状況が伝えられ、時間の経過と共に次々と悲惨な状況が画面に映し出されてきまし

たが、吹田市を始め北摂地域もかなりの被害が出ていました。会社では出社できない社員も多くその安否確認や情報収集に当たりました。被災地方面に住む社員や、得意先、取引先、関係機関等を車で状況を確認に行きました。終戦直後の空襲に遭った町の様子は覚えていませんが、今、目にしているような状況だったのだろうかと思惟しました。道路の両側の建物が倒壊したりゆがんだり、1階部分がつぶれその上に2階部分が乗っかっていました。あちらこちらで焼け跡の残り火や煙が立ち上っている。車の中から見た空が、やけに広く大きかったのを今でも鮮明に憶えています。

それからしばらくして子供も大きくなって大阪市北区の中崎町に引っ越しました。家の目の前に扇町公園があり、歩いて3分程で日本一長いと言われている全長2.6kmのアーケード

が続く天神橋筋商店街がありました。天気の良い日は扇町公園でジョギングや



散歩をしましたが、雨の日は商店街の端から端まで傘を持たずに歩いたりしました。

大阪は食い倒れの町といわれるだけあってここには和洋中のおいしい物、珍しい物などたくさんのお店があり、環状線天満駅近くには大きな市場もあり食材も豊富でよその町から買いに来る人もたくさんいたようです。駅裏の入り組んだ路地には串カツ屋、寿司屋、居酒屋、お好み焼き屋、立ち飲み屋が軒を並べ、午前中から多くの人が食べたり飲んだりしています。店の中では隣り合わせに座った知らない人とも阪神タイガースの話などあちこちで盛り上がっていました。気取らず肩肘の張らない気さくな庶民の町というぬくもりの感じる懐かしい場所です。

そんなこんなのお阪が私の故郷です。